# 児童養護施設入所児の思春期課題

―小規模化した施設での YSR と CBCL を用いた検討から―

16001PCM　井盛　彰乃

## 問題と目的

**1. 児童養護施設の現状**：児童養護施設の入所児童は 2013 年に 29, 979 人であった。このうち，被虐待経験のある児童は 59.5%であり，2008 年度の同調査の被虐待経験のある児童養護施設入所児の被虐待率 53.4%よりも増加している。また，発達障害などの課題を抱える児童も増加し，養育が複雑化している。

橋本・明柴（2014）は親の代替的役割としての支援者をモデリングできる環境を準備することが必要だとしている。そのためには，児童の養育にはできる限り安心した生活が送れるような環境を用意し，家庭的な規模での個別的な養育が重視されているとしている。厚生労働省（2002）は施設の小規模化、地域分散化や里親委託の推進などの家庭的養護を推進している。

児童養護施設でも，児童養育単位を小さくし、児童 6～8 人のユニット単位で養育をおこなう小規模グループケアが増加している。平成 18 年度には 284 施設で実施されていたが，平成 27 年度には 436 施設 1057 か所で実施された。

**2. アタッチメントに課題を抱える子ども**：渡辺（2001）によれば，本来養育者である親と離れて，児童養護施設で生活することになった子どもは，一時的にしろ，半永続的にしろ，親との別離（対象喪失）を体験している。子どもは親を愛着対象としているため，虐待そのものではなく，親との別離により情緒的混乱や心理的問題を生じる危険性があるとしている。

**3. 入所児童における自己評価と他者評価**：坪井（2007）は子どもたちの感じている内面的な問題は，職員の目からは見えにくい可能性があるとしている。また，職員側から見た注意や社会性の問題が，子ども側の別も問題のサインである可能性を指摘している。

市川（2013）が大舎制児童養護施設での YSR と CBCL を用いた研究では自己評価と職員による他者評価に相関がみられなかった。

本研究では，小規模化した児童養護施設での自己評価と他者評価の関係性を検討する。また，相関の程度の背景を自己イメージと対人関係の側面から検討する。

## 方法

**1. 調査協力者**：調査協力者は，児童養護施設 1 か所の小規模グループケアに入所している中学生と高校生 9 名（男子 2 名，女子 7 名，平均年齢 14.9 歳，*SD*= 1.61）であった。また，各対象生徒の所属するグループの職員であった。

**2. 調査内容**：協力の得られた子どもに YSR（Youth Self Report）とバウムテスト，人物画，を実施した。また，各グループのリーダー職員には CBCL（Child Behavior Checklist）を実施した。

**3. 調査期間・調査手続き**：2017 年 7 月から 2017 年 12 月に実施した。実施の際には，職員立ち合いのもと本人に調査について説明を行った。同意が得られた場合，児童と職員にはそれぞれ個別に調査を実施した。

## 研究 1

**1. 目的**：児童養護施設入所児童における自己評価と他者評価の関連性について明らかにする。

**2. 結果と考察**：YSR と CBCL において下位尺度のうち同一の症状群尺度で有意に強い相関がみられたのは，「不安・抑うつ尺度」（$r$= .794, $p$< .05）であった。また，「身体的訴え」（$r$= .642, $p$< .10）は中程度の相関の有意傾向がみられた。このことから，「不安・抑うつ」と「身体的訴え」については子どもと職員の間で一定の共通の認識があることが分かった。

個別の質問項目について相関を求めたところ，「吐く，もどす」（$r$= 1.030, $p$= .01），「食べすぎる」（$r$= .862, $p$= .01）「腹痛や胃痙攣」など

食に関する項目で正の相関がみられた。一方で情緒や内面に関する項目は「ひとりぼっちで寂しいとこぼす」（$r$= .680, $p$= .05）を除いて正の相関がみられなかった。対象の児童養護施設では職員と子どもが一緒に食卓を囲むため，そこでの会話や行動から共通の認識を持ちやすいことが考えられる。一方で，情緒や内面に関することは職員には伝わりにくいことが考えられる。

対象の子どもごとに YSR と CBCL の尺度の相関を求めたところ，最も相関の強い子どもは（$r$= .830, $p$= .05），最も相関の低い子どもは（$r$= .486, *ns*）であった。対象の子ども 9 人のうち，強い正の相関がみられたのは 7 人，中程度の正の相関がみられたのは 1 人，相関がみられなかったのは 1 人であった。これは YSR と CBCL で相関がみられなかった市川（2013）とは異なる結果であった。結果が異なる要因として，小規模化した施設であったため特定の職員と関係が築かれたことや少人数での食卓場面であることが考えられる。また，対象年齢が高かったことも影響していると推測される。

各質問項目の得点について平均の差を検討するため $t$ 検定を行った。その結果, CBCL が YSR よりも有意に得点が高かったのは「人の注目を引きたがる」（$t$= .231, $p$= .05）であった。一方で，YSR が CBCL よりも有意に得点が高かった項目は「頭痛」「自分が悪いと思いすぎる」「よく空想にふける」など症状や情緒に関するものが多く，23 項目あった。このことから，職員から見て目立ちたがっていると感じる場面であっても，子どもは症状や情緒の問題を訴えている可能性が考えられる。

## 研究 2

**1. 目的**：中高生における，自己評価と他者評価の相関の程度と自己イメージや対人関係について検討する。YSR と CBCL の相関があり臨床域の尺度がない群を一致群，YSR と CBCL の相関があり臨床域の尺度がある群は一致臨床群，また相関がみられなかった群を無相関群とした。

**2. 結果と考察**：一致群は描画においては自我の未熟さがみられた。自我防衛の脆弱さと行動の衝動性がみられた。そのため，養育者に様々な自己の問題が伝わりやすかったと考えられる。

一致臨床域群は，自己拡大の欲求はあるものの環境からの強い圧力を感じている。また，自信のなさや不安が描画で表現された。YSR と CBCL の T 得点で大きく得点が異なった項目に「身体的訴え」,「不安・抑うつ」があった。近藤（2009）は思春期以降に自立や自己主張をめぐって「悪い子」をださざるを得なくなると不安や罪悪感が高まり情動不安定が高まるとしている。本研究でも同様のことが考えられるが，子どもと職員では認識が異なった。また，身体症状や不安抑うつは大人からは気付くことが難しい可能性が示唆された。

無相関群では，子どもは「身体的訴え」など内面的な部分を問題だと思う一方で, 職員は「社会性の問題」などに注意が向いていた。また，描画において自己イメージの拡散がみられ，情緒発達の未熟さや社会性の未熟さがみられた。

## 総合考察

**1. 各群の自己イメージからみられる課題**：一致群は自我の未発達，自我漏洩感がある可能性が考えられる。一致臨床群は，自立や自己主張を前に不安や罪悪感が高まっている可能性がある。また，上手く身体的症状などを伝えられていない可能性が示唆された。無相関群は，自己イメージが拡散している可能性が考えられる。

**2. 入所児童の思春期課題**：自立や自己主張をめぐり不安定となる。また，思春期に自立への欲求が高まり，幼少期の未解決の葛藤が出現するため, 個別的に未解決の課題を扱う必要がある。未解決の課題として，自己イメージの統合，自我の防衛，社会性の獲得などが考えられる。

**3. 今後の支援に向けて**：それぞれの子どもは週 1 回程度のセラピー等だけでは課題の改善が難しく，生活場面での取り組みが必要不可欠である。そのため，それぞれの段階に応じた取り組み課題を明確にし，育ち直しが必要だと考えられる。また，施設心理士は職員からは子どもの自我の未発達，身体症状，不安・抑うつについて把握することが難しいことを念頭に置き，必要なスクリーニングを行い，心理的ケアの方針を示していくことが重要であると考える。